トークイベント

日　時｜2021年2月11日［木・祝］　14:00－16:00
会　場｜花しょうぶホール
出　演｜第１部：加藤真也、加藤真浩、永江智尚
　　第２部：江村和彦、小島雅生、原 歩
　　第３部：加藤マンヤ、篠田美有
司　会｜山本辰典

記念展に出品された作家の中から、作品制作や芸術にかける思いを語っていただきました。第１部『彫刻について』、第２部『素材について』、第３部『芸術と社会について』をテーマに、制作の様子や作品の画像をもとに、彫刻をつくりはじめたきっかけや、様々な素材技法表現についてや、社会との繋がりなどを語っていただきました。来場者の皆さまにも芸術に対し関心を持ってもらうことや、まちなかに彫刻やアートがあることの意味について、考えていただくことができました。

第１部「彫刻について」

左から司会の山本辰典氏、加藤真也氏、永江智尚氏、加藤真浩氏

第２部「素材について」

左から江村和彦氏、原 歩氏、小島雅生氏

第３部「芸術と社会について」

左から篠田美有氏（リモート出演）、加藤マンヤ氏

第1部：加藤真也、加藤真浩、永江智尚　　司会：山本辰典【3】

山本辰典（以下：司会）
皆様、こんにちは。全くお客さんがいないのかなと思って準備していたのですが、意外と会場に来て下さっています。ありがとうございます。インスタライブの方々も聞こえていますか、見れていますか？登壇者の方達も随時ライブを見ながらトークを進めていただけるようです。

プロムナード記念展を20周年まで続けてくる中で、5周年の際は愛教大出身者の片岡真実さん【1】、10周年の際は北川フラムさん【2】をお呼びし、専門家の方々に基調講演をしていただく機会を設けてきました。今回、この展覧会を準備していく中（新型コロナの関係）で今日を迎えられるかどうかも分からない状態で本日まで来ました。そんなこともあり、20周年を迎えた今回、一度作家の人たちの生の声や作家の人となりが市民の皆様に伝えられたらと思い、このトークイベントを企画しました。

【1】

【2】

登壇者の方達は本展覧会の出品者の方々です【3】。右側バスケットボール選手の人体彫刻をつくられた加藤真浩さん、左側の人体彫刻をつくられた愛教大の永江先生、真ん中の磨き石、石彫の加藤さんです。事前打ち合わせをしていなかったのですが、加藤くん（加藤真浩）と加藤さん（加藤真也）でよろしいですか？本展覧会、「加藤さん」がたくさんいらっしゃいます。この後の第3部にも加藤さんがもう1人出てこられますのでよろしくお願いいたします。

3名の方にご登壇していただいた理由ですが、主に「彫刻」という領域で制作を続けていらっしゃるので、そのことから今回彫刻にまつわる色々なことをお話ししていただきたいと思います。色々と言っても20分しか時間がありませんので、全然伝えられないかもしれませんが皆様お付き合いください。それでは彫刻についてお話を聞いていきたいと思いますが、まずは「なんで彫刻をやろうと思ったか？」です。絵画や工芸など美術の領域には様々なジャンルがありますが、なぜ彫刻制作を選んだのでしょうか？一番若い加藤くんからお願いします。

加藤真浩（以下、加藤ま）
彫刻のきっかけですが、元々小さい頃から何かを作ることだったり、絵を描くことだったりが好きだったんですけど、直接的なきっかけは、高校生の時の美術の授業でフィギュアを作ったことです。その時は北斗の拳のキャラクターのフィギュアを作ったんですが、全くゼロのところから作ることが僕にとっては面白くて、今も彫刻やものづくりを続けています。

司会　彫刻だけじゃなくて、美術に進もうかなと思ったところまで膨らませるとどうですか？

加藤ま　僕は中学は水泳、高校は水球をやっていて、美術とは一切関係のない高校生活を送っていたんですが、いざ進路を考えて「何しよう？」ってなった時に、僕の恩師の高校の美術の先生が僕のことを初めの授業の時に美大に行くと思っていたらしくて…。

司会　それは（加藤くんが美大に行くであろう）理由があったんですか？

加藤ま　いや、先生に後から聞いたら「そんなこと言ったっけ？」と言われたので分からないですけど、その話から初めて美大っていう選択肢があるんだって気づいたんですが、それが2年の終わり頃です。ただそこで美大に進むための色々なことを始めた訳じゃなくて、3年生の夏までは部活の大会があったから、それが終わってからデッサンを毎日やったり、粘土で制作をしたりして、そこから彫刻の勉強をどんどんしていきました。

司会　大学に入る前に彫刻に進もうと決めていた訳ですね？

加藤ま　そうですね。絵よりは単純に立体をつくることが好きだったので。

司会　ありがとうございます。それでは永江先生、きっかけをお願いします。

永江智尚（以下：永江）
中学生の時、最初に美術をやるか、将来何になろうか色々考えた時に、医者もいいな、弁護士もいいな、政治家もいいなみたいに色々考えていたんですけど、人生1回しかなくて一番面白いのはなんだろうなと思ったら、美術が一番面白そうだなと思ったので、高校で美術をやるぞと思って高校に入ったんですよ。その時は、油（絵画）をやりたいと思っていたんですけど、学校にいらした美術の先生が彫刻の先生で「彫刻やってみんか！」と誘うので、“えー、油やりたい”って思いながらも、「記念になるし」って言われ、爺さんをモデルにした彫刻を作ってみると、次は「もっと大きい彫刻を作ろう」と指導されて、「えー、嫌だ油やりたい」と思ってたんですけど、ずるずる彫刻を作っていたんですよ。これって結構彫刻を続けている人の多くが、作ってみたら面白かったっていうことが多いと思うんですよね。それで他人へダイレクトに塊や存在で訴えかける（彫刻の）魅力が面白いなと引き込まれてしまったのが始めたきっかけです。

司会　高校時代、何だかよく分からないけど導かれながら彫刻の制作をしていく上で、大学でも彫刻を専攻していこうと思って大学に進んだんですね？

永江　そうですね。

司会　（加藤さんを向いて）緊張していますか？

加藤真也（以下、加藤し）
緊張しています。喋るのが苦手なので…。

司会　肩でも揉みましょうか？

加藤し　大丈夫です（笑）。あんまり言うのが恥ずかしいんですけど、大学の頃に付き合ってた彼女がめちゃくちゃ絵が上手くて…。

司会　そういうのが聞きたいんですよ！

加藤し　それに刺激を受けて絵を描こうとやってみるんですが、どうしても彼女に敵わなかったんだけど、授業で立体をつくる課題があった時に、彫刻は高校時代から周りのみんなもやってこなくて、絵を描くことばかりやってきた人たちで、逆に自分は大学に入学してから美術を始めたので、スタートラインが彫刻はみんなと一緒で、やってみたら他の人より自分のが得意なんじゃないかと思えました。その時に周りを見渡してみたら自分が彫刻向きだと気づいて、もちろん彼女よりも僕の作品のが輝いていたので、これなら勝てると思って。

司会　彼女と作品を比較したってことですか？

加藤し　彼女の作品と自分の作品を比較する話です（笑）。授業の講評なんかで作品が並んだ時に彼女の絵と自分の絵とではいつも負けていたので、彫刻課題の時は自分の作品が別格に良かったので、向いてるんだなと思って彫刻を選択しました。

司会　結果的にはその彼女とは？

加藤し　今の嫁さんです。

会場　おおおー（拍手）！

司会　今日会場に来られていますか？

加藤し　全然来ていません（笑）。

司会　ということで、それぞれのきっかけをありがとうございます。高校から（彫刻を）選んだ方、高校から大学に進学する際に彫刻を選んだ方、大学に入ってから彫刻を選んだ方とそれぞれ彫刻を選ぶタイミングは違った3名ですが、結果的にはそれ以後ずっと彫刻制作を続けている訳です。同じ「彫刻」の領域で制作を行っていますが、それぞれのスタイル（作り方、素材）が違います。加藤くんなら人

体を扱った塑像、永江先生も人体を扱った塑像、加藤さんだと石彫ということでそれぞれ「なぜそのスタイルなのか?」を加藤くんからお聞きしたいと思います。

加藤ま　僕は塑像をやってるんですけど、「塑像」と言って分かりますか?

司会　粘土を使って作品をつくる?

加藤ま　粘土で作品を作っています。今写っている作品【3】も粘土で作っているんですが…。これ【4】が作り始めのところですが、ここから段々完成へ。段々顔を作り込んだり【5】、胴体を少し変えていったりしています【6】。僕は粘土の魅力としては、どれだけでも自分で追求していけるというのが一つの魅力だと思っています。終わりがない。答えがない。答えがない訳じゃないけど、ずっとやれるところが魅力的でずっとやっています。

【4】

【5】

【6】

司会　はい、ありがとうございます。そうしましたら、永江先生お願いします。

永江　自分も加藤くんと一緒で、粘土ってどこまでもできるので、執念深くずっと、もうちょっと足したいなとか引きたいなとかを最後までネチネチ、ネチネチやるのに非常に向いている点が自分も一緒です。最後呪いをかけるんじゃないかっていうぐらい最後までつくり続けられるのが一点で、あとは(粘土を)延ばしたり潰したりするとグッと力を込めているように見えたり、スーッと爽やかに見せたりすることが、かたちと一緒に楽しめるというか色々なことを試行錯誤することができるところが非常に魅力的です。

【7】

今回の展覧会には漆の作品【7】も出していますが、そういう時には素材も大事にしながらつくります。多くはかたち自体がどういうかたちなのかに重きを置いて粘土をやっています。あとは加藤くんや自分とかはアカデミックな仕事と言われるような古典的な彫刻を作っているのですが、今ある彫刻のフィールドの中でより深く掘っていくような領域だと思っていて、対して現代的な仕事、今回のプロムナード展にも色々作品がありますが、そういう現代的な仕事は彫刻という領域をどんどん拡げていくタイプの仕事かなと思っています。自分の場合は先人とかを越えたい気持ちが強かったのでより深くという風な仕事に目が向いてつくっています。

司会　塑像をやっているお二人は相容れる所と相容れない所とかがあったりするんですか?(加藤くんは)永江先生のこう言ってるところは分かるけど、この部分は分からないとかありますか?

加藤ま　今おっしゃっていた「深く追求する」「過去の先人たちの…」というところは僕も思っていて、例えばロダンとか昔の彫刻家の作品が今でも凄い作品とずっと言われ続けているところだったり、そこで考えると人体をやり続ける事で何か見えてくるものがあるのかなっていう。時代が経っても未だに多くの人たちが魅了され続けているのは何かがあるのかな…。何かは分からないけどそれを深く探っていると思って、僕は人体をやっています。

司会　永江先生、補足があれば。

永江　だいぶ似ているタイプなのかなとは思っていて、自分は出来ればもっとフィギュア的な仕事をやりたい気持ちもあるんですけど…。

司会　そうなんですか?!

永江　そうなんですよ(笑)。もっともっと面白い仕事をやりたいなと思っているものの、歳もそれなりにとってきたし、もう少し腰を据えた仕事をしないとなと関ぎ合っているところです。でもこの10年の間では、もっと幅を拡げたいなという想いがあるので、加藤くんの仕事とかは非常に刺激になっています。

加藤ま　ありがとうございます。

司会　加藤くんと事前に打ち合わせをしている時には、その辺のスタイルなんかは迷いがあると言っていたけど、永江先生にもちょっと迷いがあったりすると言うのは似ているけど、迷いなんかも似てないですか?… ダメだ!!これ朝になっちゃうからやめましょう(笑)。
加藤さんに移ります。石彫のスタイルについて。

加藤し　大学の頃は「石彫大変そうだなー」と思っていてあまりやっていなかったです。卒業制作で1つ作っただけで卒業してしまいました。卒業してから3年目ぐらいに後輩が「石彫の集い」というシンポジウムに誘ってくれて、10人のプロ作家と10人のアマ作家が2週間一緒に寝泊まりして、蛭川という石の産地で、クズ石(石を切り出すときの端材)から作品を作り上げることに5〜6回参加させてもらった。それから本気で石彫をやりたいなと思ったのがきっかけです。
　例えば、絵画なんかだと色の組み合わせが無限大にある。粘土だと付けたり取ったりの終わりが分からないから、そこが好きな2人(永江先生、加藤くん)と、終わりが自分だと分からないから、自分で作品の完成ができない。絵もそうですし、塑像もそうなんですが、自分は終われないっていうのがあるので、自分は石とか木とかに向き合って、もうこれ以上自分の技術の限界だっていうところが自分の今の終わり方です。次はそれを越えたい。もっと技術的にも上がりたいし、表現もできるようになりたいという形で進めている。その方が相性が良い。一発勝負の闘いみたいな方が良い。

司会　元々ある材料から削っていく加藤さんと、かたや付けてつくっていくという違いがあって、専門的な言い方をすると、モデリングとカービングと言って、付けていくことと削っていくことは逆の行為だから、その辺が終わり方も違いますね。加藤さんの話の中で「野外シンポジウム」のことに触れていましたが、ちょっと突飛な話にはなってしまいますが野外彫刻の役割なんかを作家自身の捉え方で話していただけたら。加藤さんから。

加藤し　自分は石彫なので、石の彫刻が凄い気になるんですが、野外彫刻はパティオのプロムナードでも出させていただいたこともあったんですが…。やばい、真っ白…。

司会　例えば、日本中の野外彫刻でこういう作品が社会的な役割を果たしているという、自分の中で感じるような作品が具体的にあれば教えてください。

加藤し　人と触れ合えるような石の彫刻がすごく良いなと思ってしまって、例えば札幌に「ブラック・スライド・マントラ」というイサム・ノグチの滑り台の作品があるんです。それは札幌駅から出てきた街中にドンとあって、子どもが遊べるようになってるんです。車はそこをスピードを出さずに避けて通っていかなければいけないというのがあったり、六本木にある安田侃の「意心帰(いしんき)」、白い大理石の作品があるんですが、それは真ん中に穴が空いていて、親子がショッピングに来た時に子どもがその中に入って遊べるような、かたちも良いですし、街と人と関係を作る野外彫刻、街に影響を与えていくような作品なんかは凄いなと思っている。

司会　ありがとうございます。永江先生お願いします。

永江　今おっしゃった「意心帰」のやつだと大理石で、でっかい穴の中に入れて、実際入ってみると面白いですよね。私も何度かスーツ姿のおじさんがその中に入るのを、その周りを若者が歩いていたりする中で見ました。(その光景が)非常に安らぐというか、やっぱり彫刻と直接的に関わり合えるというのが野外彫刻の一つの魅力だなと、あとはその場所自体に、意味性を付加している役割があると思っていて、例えば、自由の女神とかっていうのもニューヨーク自体が自由だっていうだけじゃなくて、自由の女神があることで自由度が上がったり、あとはハチ公像とかもそれがあることで、あそこの前で待ち合わせをしようとそれぞれの行動が変わっていくというのも、やっぱり彫刻があるから。みんなの動きが変わって、想いが変わっていくことも一つの魅力だと思います。

司会　ありがとうございます。僕とか加藤くんの世代だとアトリエで作っている時に屋外に作品を置かなきゃいけないってことを意識していなかったんですが、加藤くんと事前に話してる時にあまりピンときてなかったけど、プロムナードに1回、屋外へ作品を出しているけど、あの時はどんなことを思った?

加藤ま　単純に嬉しかったですよ(笑)。

司会　それはなんで?

加藤ま　彫刻って僕の中のイメージでは、外に置かれているものだったので、美術館とかに行かなくても、どこかの公園とかに彫刻があったりだとか、一番誰でも見にいけるようなところに自分の作品が置いてもらえたというのがすごく嬉しくて、なんか彫刻をやってきて一つのゴール、とは言い過ぎかもしれないけど、一つの着地点ではあるのかなと思っていて、この作品とかも今実際に名古屋芸大の近くにずっと置かせてもらっているんですけど、色んな人に見てもらえるというのは嬉しいです。

司会　これ【8】大きいんですよね?

【8】

加藤ま　2mぐらいあります。ボクサーの作品なんですけど、(置いてあるところが)福祉施設みたいなところで、「“頑張りましょう”みたいな意味合いで置きます」と言われて、施設の担当の人にこういうのでもいいんだなと、自分の中でこういうイメージしたものが、誰かに僕がイメージしてつくった意図はなかったんですけど、設置されているというのは嬉しいなと思います。

司会　ありがとうございます。写真で見るイメージより遥かに大きい作品だったり、石を削るなんて大変な作業ですので、彫刻制作には本当に苦労が沢山あります。本来はそういうところまで深掘りできたらもっと面白いんですが、時間もあるので、最後にそれぞれの思う「彫刻とは?」ということについて、自分が思う「彫刻とは?」について話していただきたいと思います。加藤くんから。

加藤ま　すごく難しいですね。朝の打ち合わせからずっと考えていたんですけど、さっきの塑像の「なんで塑像を選んでいるんですか?」と一緒で、自分にとって彫刻っていうのが終わりがないもの。漠然としていますが。

司会　作っている上でですか?

加藤ま　そうですし、自分の中で彫刻というものはそういう仕事で、どこまでも勉強できる。死ぬまでにずっと終わらずに勉強していくんだろうなっていう風に思います。全然一言じゃなくてすいません。

司会　一言じゃなくていいですよ(笑)。永江先生お願いします。

永江　(加藤くんの意見)綺麗ですね。さっき言ったようにすごくのめり込む世界だと思うんですけど、のめり込むと、場所を用意して道具も用意して、色々していくと抜け出せなくなるので…。

司会　自分で首を絞めていくんですか?

永江　どんどん、どんどん辞めるためには指を摘めなきゃいけないんじゃないかと思うぐらい、自分にとっては呪い的になってきていて、でも呪いだからこそ辞めずに続けられて、よりもっと面白いものを出してみたいという思いで繋がっているような気がします。

司会　ありがとうございます。それでは加藤さん。

加藤し　今の話を聞いて共感というか、アトリエを作ったんですけど、スランプの時に(アトリエを)使えないんですよ。作りたいものが無くて、家で遊んでいると嫁に凄いプレッシャーをかけられて、苦しいんですが…。

司会　それはどれくらいの期間空いちゃうんですか?

加藤し　最長だと1年ぐらい、手がつかない時がありました。「彫刻とは?」で定義として彫刻を知りたくてすごい勉強したんですが、すればするほど霞んでいくという。全然分からなくなっていくので、何なんだろうってなるので、彫刻とは何かとここでは言えないんですが、自分にとっての彫刻とは何かを制作しながら見つけていこうとしているというのが、自分にとっての「彫刻」です。

司会　ありがとうございます。カッコいいです。事前に打ち合わせた時に加藤さんが「言葉で伝えられないから石彫やってるんだよ」とおっしゃっていて、正にそうというか、今回の展覧会に参加して下さってる多くの方があまり普段喋らなかったりして、加藤さんとかも舞台に上がってもらうのに「すいません」って頭下げて上がってもらいました。本来まだまだ掘り下げなければいけない部分が多くありますが、ここまでが「彫刻について」ということで3名の方ありがとうございました。続きまして、第2部「素材について」ということで別の3名の作家さんに少し踏み込んでお話をお聞きしたいと思います。

第2部：江村和彦、小島雅生、原 歩　　司会：山本辰典　【1】

山本辰典(以下:司会)
　第2部「素材について」を始めさせていただきますので作家さんの紹介をさせていただきます【1】。右の女の子が組体操をしている作品の原歩さんです。真ん中の恐竜の江村和彦さんです。左の作品の小島雅生さんです。3名を呼んだ理由ですが、大学の頃から同じ素材や技法を扱いながら今に至るまで、作品の制作を続けていらっしゃるので、その辺のお話を聞かせていただきたいなと思っております。1部の際に粘土から作品づくりをする作家さんがいらっしゃいましたが、2部の方々も作り始めは粘土だったりするので、そんなところから始めていきたいと思います。それでは江村さんからよろしくお願いします。

江村和彦(以下:江村)
　第1部では3名の方が彫刻についてということで、その内の2名の方が粘土は執念深く触れると話されました。そしてこの2部で呼ばれている3人は工芸から発進して今作品づくりをしているメンバーでして、僕は焼き物を作って今回作品を出しました。昔から、今でもそうなんですが、昔から食器を作っていてロクロを回したり、粘土の塊からひねり出したりして、食器を作っていく中でこういった彫刻的なものを作るようになって、その面白さが今も夢中になって作っているところです。
　今回も展示会場に並んでいますが、僕はロボットと恐竜が好きなので、組み合わせて「ロボザウルス」なんて名前を付けてやっています。同じ粘土でも先ほどの加藤くんや永江さんもおっしゃった、テラコッタや彫塑用の粘土とは違いまして、いわゆる、焼き物になるもので作っています。先程終わりが無いぐらい突き詰めると永江さんなんかはおっしゃっていましたが、焼き物にするために乾燥させるので終わりが逆にあります。乾燥させるけども作業のために乾燥させ過ぎないで行ったり来たりを繰り返しながら、一番良いかたちは何だろうかっていうのを探りながら作っていきます。
　彫刻とちょっと違うと思うところは壺をつくるみたいに紐をくるくる【2】、いわゆる、土器を作ったりするようなかたちで、ロクロも引くので尻尾の部分はロクロで引いて【3】、胴体部分ができたらお尻につけて尻尾として乾燥させて【4】、素焼きをします【5】。釉薬をかけて【6】こんな感じになります。このプロセスが一番楽しくて、

【2】

【3】

【4】

【5】

【6】

【7】

窯から出すまではちゃんと出来上がってるのかなという、出来上がってるんだろうけど、でも開けてみるまでは分からないという、そこが焼き物の一番楽しいところで、しかも焼き上がった後【7】、見る人が「これって焼き物なの?」とか違う素材に見えるように釉薬を変えたりすると、そういった表情が見えるところが、見るものに不思議な感じを持ってもらえたらいいなと思いながらつくっているので、同じ（彫刻）立体を作るにしても1部の方々とは少しアプローチが違うのかなと。粘土の変わっていく過程、色が変わっていく過程を楽しみながらやっていくのが僕の制作のスタイル、かたちになっています。

という感じで進めていっていいんですか?原さんに回しましょうか?僕は粘土を使っているんですが原さんは金属の作家さんなのでどうやって作っているんですかね、あれは?

原　歩（以下:原）

【8】

私は今回は2つ出しています。21回目のプロムナード展にF.R.P.の作品【8】を出させてもらっていまして、樹脂の作品です。茶室の方に同じかたちのものでブロンズのバージョンを出させてもらいました。

なんで金属かということですが、金属の魅力だとかそういうことは小島さんにお願いして、江村先輩は「楽しい」というワードで取り組まれていることだったんですが、私は楽しいという感覚があまり無くて、どちらかというと「辛い」感じです。辛いですが、その辛さが自分にとっては必要だと思っています。今回このことをお話しするということで自分の中でも金属をやり過ぎているので、（普段は）そこまで深く考えることが少ないんですが、今回自分で自分のことを知るというか、ワードとして自分の中で工芸だとか、とりわけ民藝が自分の中で重要になってきます。金属を選んだ理由は工芸にしがみついているというか、そういう部分があると思っていて、キーワードかなと思いました。

すいません、私ばっかり喋っていて…。弟たちにも「今じき長くなるなよ」と。

会場　ハハハハ（笑）

原　気をつけます。今回工芸に携わるきっかけ、大学に入った時が一番大きいんですが、私たち3人とも同じ大学のコースでして、5つの素材のどれかを最終的に選んで、それを研究していくというコースなんですけども…。

司会　ちなみに5つというのは?

原　金工、陶芸、ガラス、織り、漆です。その中でも私は金属を選んでるわけですけども、その前に大学に入った時が、（高校時代に）全然美術をやらずに入ってしまって、美術に対する気後れがあったので、それを埋めてくれるのが工芸であり、民藝という存在でした。あとは、先輩たちが、江村先輩だったり小島先輩が（愛教大の造形文化コースの）1期生の人たちが特に（制作の）環境づくりに取り組まれている姿を1年生の時からずっと見ていたので、それが工芸とか民藝の精神というかそういうものに繋がるのを私は感じて、もちろん、先生たちがその前にはおられるので、その影響が大きいんですけれども、1年生で入った時の私たちからすると先輩たちの取り組む姿が強く影響としてあって、今でも先輩たちが（制作を）続けてくれているので、それが支えになって今でも続けられるという感じです。どこまで話せばいいか分かんなくなっちゃいました。

司会　まだ準備されていたんですかね?

原　まだあります（笑）。

山本　そしたら一旦、江村先生、陶芸を選ばれたきっかけを言っていただいて、原さんの金属を選ぶきっかけへと。

江村　原さんが言ってくださった通り、5つの素材があって僕の頃はその中で2つの素材を選んで、そこから1つを選ぶというかたちだったんですけど。まあ、肌に合うという言葉が一番適切かなと思っているんですけど、自分に一番しっくりきたのが粘土だった。あとは、その時に食器を作っていたので、自分が作ったものが使えるというところに魅力を感じたので。当時はデザインをやりたくて大学に入ったんですけど、デザインの仕事をしていた叔父が「デザイナーなんて一部分の上っ面なところでしか仕事をしないんだから、ゼロから作れる焼き物って面白いんじゃないの」って言われたのが一つのきっかけかなと思います。元々ここに立たせてもらうのも不思議だなと思っていたのは、彫刻専攻ではなくて、工芸専攻なのにこういうところにいられるというのも今思えば不思議な感じはしています。

司会　ありがとうございます。そうしたら原さん、大学に入ってから今まで続けている金工を選んだ理由をお願いします。

原　金工を選んだ一番のスタートは隣にお見えになる小島さんの卒業制作です。1年生で入った時にすでに卒業されて研究生として残っていらした学年の方で、（小島さんの）卒業制作は卒展などの機会には見ていなかったんですね。金工室の前に無造作にボンって先輩の作品が置いてあって、その時は先輩の作品だと知らなかったんですが、絶滅危惧種の動物のタワーだったんです。言い方が分からないですがそれを見て、こんなものが作れるんだったらと、すごく響いて、これだったらやってみたいなって思ったのがまずはきっかけです。

金属自体は、私たちの（大学の）時は3年生の途中で2つに選択を絞るんですが、その時に私はガラスと金工を選んでいました。どちらかと言うと、さっきの江村先輩の反対側に行っちゃうんですが、用途を伴うものを上手く作れなくて、順応できなかったんですよ。なのでどちらかというと彫刻に近いような仕事とかの方が自分に合っているなと、そっちならできるかなという感じで作りたいものがそういうものになっていたので最終的に金工を選びました。

金工がいいのは即効性が無いのがすごくあって、とにかく工程が長いんですよ。いくつもいくつも素材を変えては型を作り変えて、最終的に金属へ持っていくというゴールがすごく遠いのが私にとってはすごく大切で、昔大学にいた時に（登壇者の）先輩たちと同じ代の森岡知香さんというガラスの先輩がいたんですが、ガラスも型物だと同じように工程がたくさんありまして、森岡さんはなんでガラスをやっているのかというと、「子どもを育てるみたいな、育てていくような感覚があるから」と、当時私たちも若かったので子どもなんか育てたことがなかったんですけども、だから私はガラスをやっているんだというのを話してみえて、すごい共感したというか、私は子どもがというよりは一つ一つ重ねていくという風に思っています。

先ほども言いましたが、気後れしていたという部分があったので、自分に自信が無くて、その自信を補うために自分にちゃんと層を置くというか、そういった仕事が私にはすごい合っていたので、未だにそれを大事にしています。そうするとやっぱり工芸に対するこだわりというので、金属工芸というものの技法を大事にしたいと思っています。

司会　原さんのきっかけになった小島さんの卒業制作は、壮絶な卒業制作の過程だったみたいですが、小島さんから話してもらった方がいいか、外から見ていた江村先生から小島さんの卒制について一言もらってから小島さんが喋り始めた方が面白いかと思いますので…。

江村　本当に命を注ぎ込むように目を真っ赤にしていた彼の姿が忘れられません。それでは小島さん。

司会　結構搬入ギリギリまで作業していたみたいですが…。

小島雅生（以下:小島）

小島です。卒業制作なんですけども、教授にチェックしてもらう直前まで手で支えていました。くっついてなくて（笑）。そんな状況だったんですけども、何を話したらいいかというところなんですけども、お二人が土を使ったり、金属を使ったりするということで素材とか技法に向き合っているということですね。お知り合いの方から面白くお話ししてくれと言われたんですが、この流れで面白い話はできないんですけど…。

そもそも金属を始めた理由は、たまたまです。小学校の頃から漠然とアートに関係する仕事をしていきたいなと思っていたんですが家庭的に裕福ではなかったので、アートに関わりながら収入を得られる仕事をしなくちゃいけないと思って、アートに関わりながら生きていくためには、プロダクトデザインや空間デザインみたいなことをしながら仕事として生きていきたいと思っていました。

当時、愛知教育大学に総合造形コースが出来まして、江村さんと私はそこの1期生なんですが、愛教大に面白いコースができたから、じゃあ行ってみようと行ってみたら、先程の5つの工芸的な分野の専門的コースだったので、「あれ?デザインは?」と思いながら、まず我々1期生から後輩の皆さんたちも何も無い状況から、ものを作り上げるための環境を準備するというのがすごく勉強になりました。

【9】

金属を溶かして鋳造するっていうことですけど、鋳型という型を作ってそこに金属を流して成形するんですが、まずは全然かたちにならない。鋳型がバラバラになってしまうところから始まって、出来上がることの喜びをそこで味わったかもしれない。

正直、大学に入る時には金属の鋳造技法は全然知らないぐらいだったんですけど、当時仲山先生という教授からブロンズ（銅の合金）の溶けた様を見せてもらいました。それは、太陽の中を覗くような美しさがあって、そこからずっと「素敵だな」と。しかも1200℃のすごいエネルギーを秘めた液体を型に注ぎ込む行為が、あたかも作品に命を注ぎ込むような、自分にとっては儀式のような、そんな技法だったので、そこから生まれるものってすごく僕にとってしっくりきていました。

【10】

原さんが先ほど、すごい長い工程を経て作るのが原さんにはしっくりきてると言っていたんですが、実は僕は長いもの（工程）が苦手なんです。だけどそんな僕でも金属を溶かして【9】型に流し込む【10】。すごく重いので、今椎間板ヘルニアなんですけど…。そんなきっかけで金属を始めるようになったんです。

江村さんも原さんもおっしゃってたんですけど、工芸的な技法、素材を大事にして今までものを作ってきていらっしゃって、僕はずっと自分が工芸と言われることに対して、申し訳ないぐらいの仕事や作品だといつも思ってたんですね。かと言って、彫刻ってなんだろうって、それよりも僕にとっては溶けた金属が命を吹き込まれてかたちになって、永遠のものとして残るそのプロセスが、そういった現象が僕の作品にとって大事だったんですよ。

僕の作品【11】は訳わからないんですよね。これは彫刻なのか工芸なのか分からない。でも一つの空間で僕の中で意味のあるかたちを配置して、一つの作品として表したいという風に思いながら制作しています。

【11】

これは最後まで僕が語っていいのかな?途中で切った方がいいのかな?

江村　（手でどうぞ）

小島　ありがとうございます。ですから、原さんは今ご自分一人で格闘しながら金属を溶かしてやっていらっしゃって、かたちになることすらすごい難しいのにやっています。それを最終的に表面処理をして仕上げて、彫刻的な仕事でありながらもすごく工芸的な仕事をされている原さんに対して、僕は（金属を）流した時に出来たバリとか型を押し分けて金属が流れて出たバリとか、失敗と言われる穴すらもその現象の一つとして受け入れながら展示をしているので、よく工芸の先生に叱られていました。

【12】

これは【12】、九州の太宰府天満宮のところで何年か前にあった国際アートシンポジウムの作品です。世界各国のアーティストが集まるイベントで僕もそこに行かせてもらっていて、9日間ぐらい滞在して世界のアーティストと関わりながら作品を最終的に太宰府天満宮の中で展示するというプログラムに参加しました。太宰府天満宮でブロンズを1200℃で溶かして作るのはちょっと難しいので、僕が展示していたのは大きな楠木の森のところなんですけど、ちょっと写真では分かりづらいかもしれませんが…。太宰府天満宮でひたすら作り続けていたのが、白い花っぽいものなんですけど、見えますかね?あれ実は蝋燭の原料、蝋なんですね。

僕も原さんも先ほどの永江先生たちも同じ粘土で彫刻を作ったものを型取りして、（僕らは）それを蝋という素材（ロウ原型）に置き換えて、それを型にとって、蝋を溶かし出して、溶けた空間に金属を流す非常に長い工程の仕事なんですけど、最終的に金属になる手前の蝋を一緒に展示してしまったんですね。（鋳造作品では）普通は見せてはいけないと言われているところなんですけど、やはり世界のアーティストと関わりながらこの空間で僕がやれることって、金属はもちろん違う場所で作ったものを持っていたんですけど、金属に置き換わる前の蝋ってすごく儚くて、触ったら割れちゃって、ちょっと温度が高いと溶けてしまうものが、鋳造という工程を経て金属に置き換わると永遠のものになるんですよ。僕にとってはすごく大事で、儚いものと永遠のものを一緒にどうしても展開したくて、初めて蝋を出しちゃった展示です。

【13】

こういった文化財のお蔵の中でも金属で作ったものや浮いてる物が蝋なんですけど、お水が張ってあって風で揺れるので、風とか（自然）現象すら自分の作品に取り入れたいという風に意識がどんどん変わっていきました【13】。

2019年、豊橋のアートプロジェクトでお世話になったものなんですけど、ちょっと見にくいんですが、ここでは金属や蝋を配置しました【14】。左側にニョキニョキッと3つ立っていて、右側にテントっぽくなっているのが見えますかね【15】。これ自然木なんですが、初めて自然素材すらも作品に取り入れてしまいました。これは実はこの枝を使わなきゃいけない想いがあってやったんですけど、（別の機会に）荒れた山を切り開いて新しい森を生み出すプロジェクトに参加して、そこで切られてしまった枝たちなんですね。それを岐阜の山奥から連れて

【14】

【15】

きて、ここで新たな命の森を作ろうという気持ちで作ったので、どの枝でもいいわけじゃなくて、そこで切られた枝に意味があったというように金属というもの、鋳造というものを大切にしながら、今目の前にあるものを受け入れるようになってきました。終着地点が分からんな。とりあえず切ります。

司会　え?そうなんですか?用意してなかったな（笑）。

江村　しゃべろうか?

司会　すいません。それが一番いいです。

江村　僕から始まって、小島さん?「さん」って言いづらいね（笑）。原さんも苦手なことを積み重ねていってということだったし、小島さんも本当なら見せるべきところではない途中の過程の蛾を、その蛾が本当は金属に置き換わるんだけどその蛾を見せるということで作品にしていったということで言えば、素材というものを通しながら出来上がっていく過程そのものと向き合ってるそれが自分であり、その素材が自分に合ったり、素材と向き合う自分というものを大事に作っている。

それが僕なんかは工芸のアプローチ的だなというのをすごく今お話を聞きながら感じていて、そうやっていくうちに小島も“分かんなくなってきた”というのは、たぶん、じゃあ自分は一体これから何を表現していくのだろうかという、ある意味迷ってるんだけどそれが楽しいというか僕も小島もそうですけど、不思議なことに大学で学生にものを教えるなんていう偉そうなことをしてるんですが、図工が苦手とか、美術があまり好きじゃない学生が多いのは、なんでだろうって考えた時にやっぱり、どうしても出来上がった作品ばっかりを評価されて、それがすごく嫌でということで嫌いになったんだという話を聞くと、僕らが今やっている出来上がる前の過程そのものが一番楽しいのにと思っているので、そういったことを僕らは作りながら伝えたいなと思っているんじゃないかなって、その過程こそ全てを見せることは作品じゃないパフォーマンスみたいなものでも作品になりうるのかなっていう風に思います。そうすると次の第3部につながるのではないかと。

司会　すごい。次のことまで考えてくださってありがとうございます。本来何も言わない方がいいんですが…。この第2部は、江村さんに器などの日常に入り込んだ制作物から話し始めていただいて、原さんや小島さんも、日常に入り込むものじゃないオブジェ的なものや社会に入っていくような展覧会だったりするところで意味を持たせるような制作をされていることを知っていただくことができたと思います。江村先生のつくる恐竜やロボットのこと、原さんや小島さんの制作テーマまで掘り下げていくともっと楽しいのですが、全然時間が無くなっちゃいますので、「素材」にまつわる魅力などのお話でした。

そもそも焼き物でもガラスや金属でも、器だったりカトラリーだったり、用途を成せば成すほど日常に入り込み、多くの人の身の回りに存在しているんですけど、同じ素材でつくられていても一般の方達には縁遠いと思われてしまう芸術とは何なのか、第2部の皆さんがつくるようなオブジェ的な作品だったり、プロムナード展の彫刻だったりする状況の芸術が日常に入り込み社会と交わる時って何なんだろうという話を第3部の「芸術と社会について」というテーマで、1人は会場で、1人はフランスと回線をつないで話をしたいと思っています。ここでは素材にまつわるお話を3名の方にしていただき、第3部へ繋いでいただきました。ありがとうございました。

第3部：加藤マンヤ、篠田美有　　司会：山本辰典　【1】

山本辰典（以下：司会）

1部2部と続けてきましたが、続きまして第3部「芸術と社会について」ということで進めさせていただきます【1】。会場にある車のボンネットの上に色鉛筆が並べてある作品の加藤マンヤさんです。それからギャラリーに入って左手すぐにある4点の絵画作品の篠田美有さんです。

先程まで作った物が社会に交わるとかそういう部分が見え隠れしている部分があったんですけども、そもそもマンヤさんの作品からスタートさせていただくと、何歳の時の作品か分かりませんが、この前旧ボストン美術館の展覧会で出していた信号機の作品とか日常の既製品を変化させて作品づくりをされているので、その辺の社会とマンヤさんの作品みたいなところを、ちょっとフワッとしててすいませんがお願いします。

加藤マンヤ（以下：マンヤ）

今日3人目の加藤なんで、「加藤だらけだなここは」と思うかもしれませんがご勘弁ください。

【2】

言葉だけでは私の作品は理解できないというか、イメージしづらいと思うんですけども、山本くんが喋っていた信号機の作品【2】というのは、歩行者用の信号機があって、それが赤と青が交互に点滅している仕組みの作品なんです。そうなっていると青なのか赤なのかどっちなんだろうと人は立ち止まってしまって「結局赤じゃん」みたいなことが言いたいという。ちょっとそういうトンチみたいなことを作品に入れ込んでいます。これは一体何を言おうとしているのか全然分からないというんじゃなくて、「ああ、これはバケツだな」とか「これは電車だな」とか分かるような、日常にあるものをモチーフにして作品を作るということをやっています。

1部2部を通して聞いていたんですが、司会の山本くんは一体何者なんだろうということで、自己紹介してないよね?

司会　1回もしてないですね（笑）。別にいいかなと思っていたんですけどした方がいいですかね?

マンヤ　ずっと聞いてくださってる方々のためには。

司会　すいません。登壇してくださった参加作家の皆様と一緒で出展をしていまして、リハーサル室で映像の作品を出していますが、今日は司会なのであまり喋らないようにということで進めてきたんですけど、はいそんなところです。お願いします。

マンヤ　社会ということを意識して作品を作っているわけではないですけども、美術っていうものをあんまり根本的には信頼していないところがあって、特に芸術とか、先程の加藤真也くんの話の中で「彫刻作品が人々に触れられる」という意見がありましたね。僕はタバコを吸う人なのでちょうど外に出てタバコを吸っていたら、別に揶揄するわけじゃないですけど、面白い看板を見つけて『これは芸術作品のため触れないでください。』と書かれていたので…。

会場　ハハハハ（笑）

マンヤ　芸術作品は触れていい作品と触れちゃいけない作品とあるんですが、露骨な書き方に僕は結構ツボに入ってしまって、その看板自体を作品にしたいなと思うようなものの考え方をして作品を作っているんです。なので社会というわけじゃないですけど、日常の中に実際にあたり前にあるものをちょっと捻る事によって全然違ったものに見えてくるというか、違うものとして浮かび上がってくるというようなことを、一番自分の作品を作るときのスタイルにしています。

司会　ありがとうございます。付け加えることなく、マンヤさんがそういう作家さんだということで、篠田さん聞こえますか?篠田さんは彫刻とか立体作品が多い今回の展覧会の中で絵画制作、ペインターですけども、最近フランスでやっている仕事を紹介していただけたら。

篠田美有（以下：篠田）

私はフランスにいるんですけども、なんでフランスに住んでいるかというと、夫の仕事の関係で住んでいます。その中で私は大学時代も絵をずっと描いてきて、彫刻研究室にいる傍でも絵を描いてきて、今も絵を描いています。

（最近）絵を描いているのも認知されてきて、昨年から（フランスは）1年ぐらいロックダウンで今もそんな状態が続いているんですけども、レストランの壁画【3】だったり、シャンパーニュのエチケットパッケージ【4】の依頼があったり、絵を提供しました。

【3】

司会　レストランの絵はどんな感じで仕事をしたのか、もう少し具体的に。

篠田　ちょうどロックダウンの解除がされるまでレストランが営業できないという時に、「この壁、まだ何も無い状態で雰囲気が暗いから、ここを明るくしてほしい」っていうことで、（店の方々が）気持ち新たに再出発したいから壁画を描いてって言われました。普段だったらレストランは営業しているんですけど、閉まっていた時に10日間ぐらいで描きました。シェフの方にお願いされて…。

【4】

司会　10日間でどれくらいの量を仕上げたのかは?

篠田　（横）5mぐらいで、（縦）1mぐらいのカウンターの上で、照明の当たらない暗い場所です。

司会　実制作のキャンバスよりも大きいところに描かせてもらったということで、絵が飛び出して仕事をされたわけで、それも社会と繋がるということもありますが、お二人とも海外生活をしながら、海外でのアーティスト活動をされていたということもあるので、マンヤさんの場合は、20年前ぐらいにイギリスで生活しながらアーティスト活動していたというところで、マンヤさんにはイギリスの場合、（社会からの）アーティストの捉えられ方を話していただければと思います。

マンヤ　イギリスに行ったのは、愛知県から助成金を貰ってイギリスに行って、「芸術の勉強をしておいで、こんだけ（予算）あげるからね」って行ったんで、結構生活的には楽というほどではないですが生活できるぐらいでした。当時小学生の子どもがいて、一緒に連れていってたんですけども、割と印象的に覚えているのが、小学校の送り迎えに行ったりすると、子ども達が出てくるまでの間は親が待っているので、日本で言うと保育園のお迎えのようなものですが、小学校のお迎えを待っている時に全然知らない父兄から「お前見かけない東洋人だけど何をやっているんだ?」って聞かれて、「今僕は大学院に行っていて、アートの勉強をしているんだ」って言うと「アートなのか?!」と。「お前はどんな作品を作るんだ?」って聞かれるので「こんな作品だ」って、非常に興味を持ってくれて。

例えば、これを日本で置き換えた時に「誰々くんのお父さん仕事何やってるんですか?」、「作品を作っています」、「うわー、すごーい芸術家なんだ～」っていうことすごく起きると思うんですけど、「芸術家なんだすごーい、私たちとは住む世界が違うんだー」以上終了。っていうことが割と起きるんです。でもそうじゃなくて「どんな作品なの?」「どういうところで見せるの?」「いくらぐらいになるの?」「それで食べていけるの?」そういう下世話なというか、アートを身近なものとして捉えていたりするんです。ヨーロッパではよく言われるんですけども、職業に良い悪いが無いのは向こうでも同じなんですが、人として一番優れている職業、～istの中で一番優れているのが詩人だと言われていて、それと同様の立ち位置でクリエイター、芸術家がいると向こうでは言われていました。なのでそういう意味で人々がアートに憧れているということがあると思いますが、憧れているからといって自分たちと全然違う雲の上の世界の話として捉えてはいないなと思ったのは、僕が向こうに行った時の実感、印象です。フランスはどうですか?

篠田　フランスも同じような感じで、（日本だと）アーティストって言うと別次元を生きているような見られ方をする経験が作品を作っていたらあると思うんですけど、でも職業としてあるっていう認識がされていると思います。

マンヤ　海外だと、物を作るという時にどうしてそういう物を作るのか、何を考えているのか?ということにすごく重きを置かれるんじゃないかな?

篠田　日本だと展示して、見た目とか技術とかを「すごいねー」、「分からない」とか言われるんですけど、こっちだと結構バイオグラフィーだとかステイトメントをちゃんと見られると思います。哲学的な部分を少し見てると思うので、それは欠かせないと思います。

司会　篠田さん、現在はそっちに行ったっきりで、なかなか分からないかもしれませんが、もちろんフランスに行く前は日本で絵を描いていたわけで、マンヤさんはイギリスから帰ってきて長いんですけど、行ってた時から帰ってきた時にギャップってありました?日本とはアーティストが違う立ち位置でいたんじゃないかな?っていうところ（海外）から日本に帰ってきたら…。

マンヤ　35歳の時に向こうへ行きましたが、35歳になって一応学生と言いながら、アート学生なんて作品を作っているだけなので、大学院へ行って作品をずっと作っているということでした。朝から晩まで、365日ずっと作品を作っていられるということを2年間やって日本に帰ってきた時に、まずびっくりするのが、「町内会の役員をやって」とか、「年男の時にサボったから地元のお祭りとか神社の役をやって」と言われて、凄まじく現実に引き戻されたというのを覚えています。それは全然質問とは違うんですけど、何を答えればいいんでしょう?

司会　アーティストとしていられましたか?

マンヤ　そこは多分変わらないと思います。それは自分の（気の）持ち方、気持ちの問題なので、ただ向こうにいるときもこっちに帰ってきても同じなんだけど、やっぱり自分が作品を発表する機会というのが向こうも日本に帰ってきてからもすぐにあったので、そういう意味では、誰か見てくれる人がいて、自分がそれを作るということでそんなギャップという大きな差はないかもしれない。

司会　篠田さんへ行く前に、マンヤさんここ数年、イギリスで活動していたのとは別にレジデンスなんかで別の国で作品発表する機会があったと思いますが、そういうところなんかも含めていただけると。

マンヤ　ここ何年かで2回ほどイタリアに滞在制作することがあったんですが、その時にすごく思ったのが、先程もちょっと触れましたがアートというものが身近なので、特にイタリアというのは本当に身近に色々な芸術があるし、立派な建築もいっぱいあるし、びっくりするような教会が小さな街の中にもいっぱいあったりして、そういう歴史があるので、やっぱり美しいもの綺麗なものだとか、そこから荘厳なもの、そして人々に興味を持たせるようなものには「これ何?」というようになるんです。日本でも我々が作っていると子ども達が寄ってくるみたいな感じで、（イタリアでは）大人が寄ってきて「これ何やってるの?」「これ何になるの?」「どうしてそういう形になってるの?」とかすごく聞いてくるというのは、向こうに行って感じた、特にイタリアで強く感じたことです。

篠田　マンヤ先生が言ってくださったようにイタリアはアートと生活が身近という話があったんですが、よく最近日本でトリエンナーレとか聞くと思うんですけども、それもイタリア語ですよね?それで今私が住んでいるリヨンという街には、2年に一度アートの芸術祭、アートのお祭りをやっていて、ダンスとアートを交互でやっているんですけど、それは2年おきなのでビエンナーレ、アートのビエンナーレをやっていて、街としてもそれをもう10年ぐらい続けていて、私も4回行っていますが、そういう取組みも街の中であったりして、市民にはアートが身近だと思います。

司会　リヨンで他にそんなような活動が紹介できますか?

篠田　リヨンはいろいろ有名なことがあるんですね。1年に1回光の祭典という電飾のアートのお祭りがあったりとか、あととても有名なのが、だまし絵でとても大きなだまし絵が町の至る所にあるんですけど。「Mur des Canuts（ミュー・デ・カニュ）リヨンの絹織物工たちの壁」【5】っていうこれは1200平米の建物に描かれた大きな壁画で、これは30年以上前からこの場所で描かれていて、何度か描き直された壁画もあれば、ヨーロッパでも最大の壁画があったり、これはだまし絵なんで、実際には窓が描かれていても窓は無くて、町の様子がだまし絵の中に描かれていて、他には街の図書館とか、リヨンの人々のフレスコ画「Fresque des Lyonnais（フレスク・デ・リオネ）リヨンの人々のフレスコ画」とか「Fresque［La bibliothèque de la cité］（フレスク［ラ・ビブリオテック・シテ］）フレスコ画［図書館］」とかがあります。

【5】

司会　どうして始まったとか知ってる?

篠田　40年ぐらい前に当時の美大の教育方針に反対していた人たちが始めた活動だったんですけど、そういう団体から出来ています。そこの壁になぜ描かれたかというと、元々、企業が何枚か広告を埋めて街の人々に宣伝をしたいというので始まったんですけど、今は広告は一切無くなって、もう壁画オンリーになりました。

司会　40年近く続けてきたことで、社会的な影響って何かありますか?

篠田　リヨンはオリンピックリオネと言って、サッカーも強いですし、お祭りを色々やったりとか美食の街だったりして、別にアートやだまし絵を観にくるという訳じゃなく、観光客や留学生も多いのでそういった色々な目的で来た人たちに街の魅力を伝えているんだと思います。その壁画の中でも子ども達が大人になっていったり、今の有名人、レストランのシェフとかを描いたり、そういう街の様子を伝えていますね。こんな街ですよーと…。

司会　街を形成する1つであるということですね。今に至るまで知立のプロムナード展も20年行われてきたわけですけど、まだまだ知立市というのは駅前の開発だとか街がつくり変わって発展していくという状況の真っ只中にあるので、芸術文化が何か影響を及ぼす可能性を見据えている状況かもしれません。その辺も含めて今後もプロムナード展も続いていくし、20周年を迎えたけどもこれから再スタートして21、25、30周年と続いていくと思います。

街中に芸術が出ていくというところで、時間も時間なので最後にアーティストの社会的な役割みたいなところをマンヤさんの主観になっちゃうかもしれませんが、言っていただけたら…。

マンヤ　これは僕の意見でしかないですが、「私はアーティストです。」ということは簡単なんですけども、本当にアーティストであるという為には、社会に影響を及ぼしたりだとかが重要だと思うんですね。で、どのようにアプローチするかというのはそれぞれのアーティストによって違うので、こういうアプローチの仕方、ああいうアプローチの仕方っていうのはあると思うけども、今回のプロムナード記念展なんかでも自分は（プロムナード展）第2回目の時に並べて、その時とは状況が変わってきていると思う。

なぜかというと、今回見ててフォトコンテストの応募者がすごい多いだとか、先ほど紹介されていた清掃活動で作品を耐水ペーパーで磨いてピカピカにするだとかを実際に体験することが重要で、ああいうことがどんどん広まっていくことで、アートというものがただ降りてくるとかじゃなくて、みんな同じ、一般の人たちと同じという基準にアートが入ってきて、例えば駅前に行くとタクシーが停まっている、鳩が飛んでいるのと同じようにアート作品があるというのが文化になっていくんじゃないかと。そうじゃないと単に変なものがあるということになって、変なものがすごく変なもので、そんなものあるなら勿体ないという事から、そういう形で市民の中に入っていくだとか、市民がしっかり認知して、それで初めて社会性があり、アーティストの伝えたいことというのが、まあ、どういうかたちかは分からないけども、市民の中に定着していくんじゃないかなという風に思います。だから、「アートが発信」というよりも、「市民とアートが常に同時に双方向で関係し合う」というようなことが一番いい状況なんじゃないかと思います。

司会　相互作用というところでいうと、マンヤさんが2回目の際に出して、5周年のシンポジウムのパネリストで登壇して、企画とかもやっておられるかもしれませんし、10周年も出されたりして、そういうような相互作用の強みという変化を感じたということですね。この20周年を迎えて。

マンヤ　そうですね。まだまだこれから変化していくと思いますし、それこそSNSだとかでどんどん発信したり、今もインスタライブが流れているのかな?そういうことで、例えば美術館に行かないと観られないとか、そういうことではない普通にもっと簡単にアートにアクセスできるような美術でもいいんですよ。人々の生活の中にちゃんと必要なものとして、ちゃんと根ざしていくことというのが大事かなと思います。だからさっきの美有さんの、Barのカウンターの奥に絵を描くことだとか、「この絵素敵だよね」そういうことからでいいと思うけどね。社会との関わりということで言えば。これは僕の一個人的な意見ですが。

司会　ありがとうございます。彫刻だけでない芸術文化が入り込んだ街づくりがまだまだ知立市で行われていくことを期待もしますし、多分そうなんだろうなと思います。これで1部2部3部と続けてきた作家さん、作り手の口から何か思うことを発信?というか、話していたことの中から気づいていただけたらなと思って続けてきました。その部分マンヤさんも長く知立市の芸術による街づくりに携わってきたのだと思いますが、もっともっと長くゼロからやってこられた宇納先生なんかもまた違う意見、思われ方をされてるんじゃないかと思うので、これで最後、閉会の宇納先生の挨拶へバトンタッチして僕らのトークイベントを終わりたいなと思います。長い時間、最後までありがとうございました。

ワークショップ

記念展会期中には、出品作家による3種類のワークショップを催しました。どのワークショップにおいても、参加者自ら工夫を凝らし思い思いの作品を作っていました。

「オリジナル缶バッジをつくろう！」

日程｜2021年2月13日［土］　10:00－15:00
会場｜エントランスホール
講師｜長谷川 厚一郎氏（愛知教育大学 非常勤講師）
対象｜どなたでも

オリジナルの缶バッジをつくるワークショップを開催しました。自由に絵を描いたり、ペットの写真を入れたり･･･思い思いの缶バッジを家族や友だちと一緒に制作しました。参加者により、200個以上の作品が制作されました。

【講師 コメント】
絵を描いたりシールを貼ったりして、世界に一つだけのオリジナルの缶バッジを作りました。気に入るまで何度も取り組んだり、親子で参加する人もいました。素敵な缶バッジができてうれしく思いました。

好きな色の台紙を選ぶ

缶バッジ制作風景

台紙に絵を描く

長谷川先生から缶バッジの加工方法を指導してもらう

シールを貼ったり、ペンで色付けをする

完成

「やきもの恐竜をつくろう」

日程｜2021年2月13日［土］　10:00－12:00
会場｜工芸室
講師｜江村 和彦氏（日本福祉大学 教育・心理学部 准教授）
対象｜小学生 10名（事前申込者）

粘土を使って、自分の想像した恐竜をつくるワークショップを開催しました。講師の先生と一緒に、図鑑やフィギュアを参考にしながら、自らのイメージする恐竜の姿を表現した作品を制作しました。

【講師 コメント】
参加した子どもたちは、始まる前からどんな恐竜にしたいかイメージを持っていました。図鑑を片手に取り組んだり、ジオラマのように木や卵などもつくり世界観をつくりだそうとしたり、それぞれの子どもの熱量を感じました。何より真剣につくる子どもの眼差しに、つくることの原点を見ることができました。

江村先生による制作工程の説明

制作風景

足やしっぽを作る

ツノをつける

江村先生に相談

完成

焼成後の作品

「言（こと）の葉（は）のカタチ」

日程｜2021年2月13日［土］　13:30－16:00
会場｜工芸室
講師｜小島 雅生氏（東海学園大学教育学部 教授）
対象｜小学4年生～大人 10名（事前申込者）

金属素材を使った造形体験ができるワークショップを開催しました。講師の先生と一緒に、葉形の銅板に絵や言葉を描く方法やアルミ線を使ったおしゃれな飾りの作り方等を学びながら、オリジナルの作品を制作しました。

【講師 コメント】
造形素材としての金属、そしてその素材を活かした技法。それらに触れ、体感し、造形活動を楽しみました。さらに、大切なひとやこと、今の気持ちを考えながら、それぞれ思いのこもった作品を制作しました。参加者の皆さんと、心から向き合う造形表現を共有でき幸せでした。

小島先生による制作工程の説明

図案を銅板に転写する

銅板に模様を描く

アルミ線を加工する

銅板を磨く

小島先生に相談

銅板とアルミ線の飾りを組み立てたら完成